

論文審査の結果の要旨

氏名 勝田 俊輔

この論文は19世紀前半のアイランド農村における社会運動を対象として、豊富な史料に分け入り、独自の議論を展開した意欲的な論考である。アイランド農村には騒擾の伝統が存続していたが、1801年の連合王国形成後、とりわけ1820年代に宗教性・政治性を色濃くおびたロッカイト運動が高揚した。本論文では、とくにアイランド南西部マンスターに焦点を絞り、大量の史料を分析してその性格を論じ、同時にこの時代のアイランド統治をになった政府のあり方を明らかにしようとする。

序章は「問題設定・研究史・史料」と題され、農村騒擾およびホワイトボーイズムをめぐる研究史をふまえて、従来の社会経済還元論をこえるところに問題を設定する。史料はアイランド、ロンドン、そして合衆国の諸機関を踏査したもので、量的に圧倒的であるが、また依拠する歴史的証言の信頼性についても慎重な留保が加えられる。第1章は「19世紀前半のアイランド農村社会」と題され、この時代の農業、1820年代の経済危機と騒擾ないし社会運動の高揚との関連を慎重に考察する。第2章は「ロッカイトの乱」と題され、この論文のもっとも充実した本体をなすが、ロッカイトの言動の実際とその政治的・宗教的特徴、そして千年王国主義的期待と1790年代から連続する革命的要素を解析する。第3章「農村騒擾とアイランド統治」は、ダブリンの総督府・主席政務官を介した統治・司法機構、そしてアイランド問題の解決をめぐる政治経済学およびモラル改革にかかわる政策論議をあつかう。終章「結論と展望」では、18世紀史から19世紀史への長期的展望のなかで問題をとらえ直している。

この論文の長所としては、膨大な史料の踏査、その史料群と取り組みつつ、自分の頭で考え、アイランド史を再構築しようとする情熱、しかも独自の分析が農村の社会運動にとどまらず、統治者側の議論、この時代のトーリ党論にまで及んでいること、などが挙げられる。勝田の既発表の研究論文・ノートは少なくないが、本論文はそれらの集積ではなく、オリジナルで緊密な構成をとる一つの仕事として提出されている。欠点を挙げるなら、圧倒的な史料の重さに引きずられて、とりわけ第2章は長大で議論が見えにくくなっている。またホワイトボーイ、ロッカイト、リボンマン、ピーラといったアイランド近代史特有の用語は、語源と用法を丁寧に説明しながら使うべきであろう。文体の生硬な箇所も無いではない。このように留保すべき点はいくつかあり、不満も残る。膨大な史料と格闘したことがそのまま論文に痕跡を残しているが、これは若さの証といえるかも知れない。とはいえ、本論文が着実に野心的な探求により学界に貢献する画期的な仕事であることは明らかである。

以上により、審査委員会は一致して、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。